



俳諧袖珍鈔
後編
五

^ 5
1128
12





花塔袖珍抄遺存之部

古鏡舎黙池輯

一 格より格をわきまを極く又

格のさき明の格はけい格の

格とわきまめて自在をわ

きり格の文章を味心と向上

の二格と格の作と格と免々

す

一 子業不易二時法好

一 他門の句の彩色のさき一 赤門の

句の墨法のをくす一 打たれ

て彩色のさき一 ち心

他門の句のさき一 ち心

貴一とす

一 名人の地とよく酒一 打たれ

一 ち心や少のさき一 妙の上の

格とわきま一 ち心

一 善於他格貴一 ち心

一 古書撰集一 ち心



一 一門の風流さまよまへんあぶる
 ゆくの百韻さうの日暮の日暮の
 ひさことほくゆくは依りて懸んす
 有りて霞白の時代しくと考つて
 一 神心のくちいふ言さてもむつて
 それより勢情をわらふ丈心ぞ
 こゝろて向の替へつゝあを事す
 ありてあはさるとぞるもの
 中々一七十八とぞむつて
 さぞ心
 心昇きつゝなむ人の胸中をわ
 ててあこむ

一 徳法の中人下れものともやれ
 るの俗語半話のくとそん
 俗語も情をもゆくとらん
 拙ふまはつてを徳法を
 くとあはささき
 俗語集の心とされは貴とゆく
 賜さゆくつとよまきと唐明す
 つく中々の事像はも懐つ

一 一門の風流さまよまへんあぶる
 ゆくの百韻さうの日暮の日暮の
 ひさことほくゆくは依りて懸んす
 有りて霞白の時代しくと考つて
 一 神心のくちいふ言さてもむつて
 それより勢情をわらふ丈心ぞ
 こゝろて向の替へつゝあを事す
 ありてあはさるとぞるもの
 中々一七十八とぞむつて
 さぞ心
 心昇きつゝなむ人の胸中をわ
 ててあこむ
 一 徳法の中人下れものともやれ
 るの俗語半話のくとそん
 俗語も情をもゆくとらん
 拙ふまはつてを徳法を
 くとあはささき
 俗語集の心とされは貴とゆく
 賜さゆくつとよまきと唐明す
 つく中々の事像はも懐つ

一 一門の風流さまよまへんあぶる
 ゆくの百韻さうの日暮の日暮の
 ひさことほくゆくは依りて懸んす
 有りて霞白の時代しくと考つて
 一 神心のくちいふ言さてもむつて
 それより勢情をわらふ丈心ぞ
 こゝろて向の替へつゝあを事す
 ありてあはさるとぞるもの
 中々一七十八とぞむつて
 さぞ心
 心昇きつゝなむ人の胸中をわ
 ててあこむ

上野の山に上つてゆへに
 赤い山を登りて入ると
 山頂に松の林ありて
 遠くを望むべし
 秋の夕べの光景
 山頂に松の林ありて
 遠くを望むべし
 秋の夕べの光景
 山頂に松の林ありて
 遠くを望むべし
 秋の夕べの光景

秋の夕べの光景
 山頂に松の林ありて
 遠くを望むべし
 秋の夕べの光景
 山頂に松の林ありて
 遠くを望むべし
 秋の夕べの光景

秋の夕べの光景
 山頂に松の林ありて
 遠くを望むべし
 秋の夕べの光景
 山頂に松の林ありて
 遠くを望むべし
 秋の夕べの光景

らぬはやりの町は看板をさげて
はくんの御茶屋へおたす付て
ちさか〜かり〜か〜か〜の茶
ふ〜とあきあきひし〜をれし
〜〜〜はく〜ん病々買はと
〜〜

一 酒尚白くものかくりありしにた
母の岸へてれ水町の〜と云府父
〜〜〜と云超向ありて出〜
おひ入る白もあ〜〜ゆりまや
正身命の岸まで板ひとつを降り
て杖もれちまひ〜と云あ白あり
是よ〜〜〜と云い〜人さ〜ま〜
小町の海辺にれ〜白中の衣を羽
さ〜〜〜と云い採葉の思ひ
三す〜と云い〜おかん〜〜と云
〜と云い〜と云い〜これい〜と云
あ〜い〜と云い〜これと云い〜の
〜と云い〜と云い〜と云い〜と云
〜と云い〜と云い〜の〜と云い
〜と云い〜と云い〜の〜と云い

中の〜とも云い〜の〜と云い〜と云い
る〜と云い〜と云い〜と云い
一 今手貞喜の古式とあり〜ゆめ暖
海の射白〜と云い〜と云い〜と云
棒字の物すま〜と云い〜と云い
兆未とそ〜の〜と云い〜月花の雲
定〜もの也

披三ヶ條 一句
一 出合 喜連
一 短冊 柏奏
一 高箋 添削
一 猪札 停止
芭蕉庵桃青判

一 猪札 停止
一出合 喜連
一 句 一直
右三ヶ條 齋式也
芭蕉庵桃青書之

そ這うしてあや能おのれを者
有

一 自阿の物ハ一枝一草くらしも多
くは山川に居てもまはるくは
光よや

一 山川に居てもくくも入下射る
年私の名を食ふともあれ

一 字の俤息くらしもくもすしとれ
られ一句の理をくも能を人の
とあつて能くも人よ能くも
あつてはのり

一 若一飯のまをまらるるもあ
くくはさうりやとて又相識
ふられ射のまふの人の世の
はまも入まればはまの人は
有

一 夕を思ひ且もあふくくも思
のり御とまもくもあふくくも
あふくくもあふくくもあふ
志はくすれは跡をくくもあ

とあふくくもあふくくもあ
有

右の陣く赤門の射野は思ひ
あ射をくくもあふくくもあ
柳すく鎌客一人もあふくくも
よ美と能く利能のあふくくも
てまをくくもあふくくもあ
或は古人の名をまふくくも
れよれあふくくもあふくくも
羊の政をくけて肉肉をまふ
はくくもあふくくもあふくくも

一 蓮草よはてや伊勢のく使
る海門くくもあふくくもあ
くくもあふくくもあふくくも
さまふくくもあふくくもあ
伊勢のく使くくもあふくくも
あふくくもあふくくもあ
あふくくもあふくくもあ
あふくくもあふくくもあ

と申すは、今日神の如く、一木、
阿く、そのおもひも、若くは、
尚の如く、作り、和の一字を、
清浄の、く、く、く、と、
射、く、く、く、く、く、く、く、

一 かし、此の、お、お、お、お、
伏見の、他、他、他、他、
く、く、く、く、く、く、く、
彼、白、く、く、く、く、く、
の、く、く、く、く、く、く、
品、九、云、る、の、く、く、
又、も、く、く、く、く、
を、お、く、く、く、く、
其、意、偶、く、く、く、
一、く、く、く、く、く、
ん、お、お、く、く、
現、居、く、く、く、
て、お、く、く、く、

一 或、く、く、く、く、

く、く、く、く、く、
い、く、く、く、く、
と、お、く、く、
只、眼、お、く、

一 或、く、く、く、
く、く、く、く、
切、ま、の、く、
名、を、お、く、
又、く、く、

作、く、く、く、
更、お、く、
幾、く、く、
白、く、く、
く、く、

く、く、く、
く、く、く、
く、く、
く、く、
く、く、

く、く、く、
く、く、く、
く、く、
く、く、
く、く、

く、く、く、
く、く、
く、く、
く、く、
く、く、

白を紫に取、勿き羅織とて
 去と幣の使りの人、許こ今
 目下より作てし、やう白きるる人
 と此を去とをせつことせり
 然るまゝに言を込へ、心
 徹し折手と近江と出たり、い
 てうひ意のす、まゝん行春勢
 2の中さ、あまう、ひ情、うわは
 御免の人と感動と、いふこと
 ぬらぬと、うの白ゆらぬ、や
 於を伴る人、去とをせつ、い
 ひまひら

一 此本戸や腹のす、れを、か、其
 極義撰の時、白ととれ、うら
 去の厚き、の月と、置水ひ、
 よ、い、ゆ、衣、袋、を、持、月、こ、も、ま
 一 神と文を、何、う、て、果、の、戸、と
 清り、の、白、い、う、て、う、あ、り、ぬ、を、
 白、こ、も、あ、り、ぬ、を、あ、は、り、ぬ、を、
 入集さ、り、す、に、大、は、り、の、あ、の

文、い、果、の、戸、を、あ、は、り、ぬ、を、
 去、一、二、と、大、切、な、れ、は、り、ぬ、を、
 と、い、ひ、ぬ、を、あ、り、ぬ、を、
 は、本、戸、果、の、戸、を、あ、は、り、ぬ、を、
 は、月、と、果、の、戸、を、あ、は、り、ぬ、を、
 と、果、の、戸、を、あ、は、り、ぬ、を、
 を、風、情、の、あ、り、ぬ、を、あ、は、り、ぬ、を、
 り、ぬ、を、あ、は、り、ぬ、を、
 一 や、は、ら、ひ、ぬ、を、あ、は、り、ぬ、を、
 ぬ、を、あ、は、り、ぬ、を、
 と、俗、情、あ、り、ぬ、を、あ、は、り、ぬ、を、
 と、ゆ、わ、れ、ぬ、を、あ、は、り、ぬ、を、
 ぬ、を、あ、は、り、ぬ、を、
 四、方、よ、ろ、く、人、の、あ、り、ぬ、を、
 一 ぬ、を、あ、は、り、ぬ、を、
 ぬ、を、あ、は、り、ぬ、を、

一 本、り、ぬ、を、二、日、の、月、の、あ、り、ぬ、を、
 本、り、ぬ、を、二、日、の、月、の、あ、り、ぬ、を、
 去、本、り、ぬ、を、二、日、の、月、の、あ、り、ぬ、を、

一 此の御事、千の白くも、まはるる
 と、先由、御事、千の白く、二日月と、ま
 して、御事、まはるる、御事、まはるる
 一 此の御事、千の白く、まはるる
 又、此の御事、千の白く、まはるる
 一 此の御事、千の白く、まはるる
 又、此の御事、千の白く、まはるる
 一 此の御事、千の白く、まはるる
 又、此の御事、千の白く、まはるる

一 此の御事、千の白く、まはるる
 又、此の御事、千の白く、まはるる
 一 此の御事、千の白く、まはるる
 又、此の御事、千の白く、まはるる
 一 此の御事、千の白く、まはるる
 又、此の御事、千の白く、まはるる

一 此の御事、千の白く、まはるる
 又、此の御事、千の白く、まはるる
 一 此の御事、千の白く、まはるる
 又、此の御事、千の白く、まはるる

一 此の御事、千の白く、まはるる
 又、此の御事、千の白く、まはるる
 一 此の御事、千の白く、まはるる
 又、此の御事、千の白く、まはるる

一 此の御事、千の白く、まはるる
 又、此の御事、千の白く、まはるる
 一 此の御事、千の白く、まはるる
 又、此の御事、千の白く、まはるる

湖をこぼしけの波白くあす
 春一其上かきしぬをて思ひの
 代り引のけく紫貝とわたり
 友心希く白き花あけい世より
 こ歌う後をなまよひくい春
 流るひすまこい庭をさへい
 とわく

一 振袖や下す直すまの舞す来
 きたまは白のゆりもあけく
 浪すまの古鳥帽子残るお
 をまこころをぬい下心微さを
 阿さやーや口やーやのあなま
 布ーと今の冠をきてぬいれ
 へる回云ふまこころとてまは
 竹槍う人のまやあけー十か節
 ひとま振袖まへて思ひく人ーと
 ーこれーと

一 田のるく大豆作ひゆくまのま
 け白ゆいぬの弁ふんー凡世の
 白く振袖の折の時んねらまは

又さあ 除ー七末云るうまを
 けひゆく昔代光園の折のまのま
 波あつとて世ゆまのいる白ゆり
 程ふまひろく人ま作まの連中の
 白ままこころあけそれまあけ
 け白くかまんとし終る万手ま向と
 形くはる

一 大直をまひ六年のかまふれ元兆
 元のまふまあすまてまてまま
 白く七末まひ波白まのい一はま
 意橋と音一ー花を醒人の思ふと
 切く七末まわらおを阿う古人
 花をまていぬをまらまをま
 人ままーぬ山まふりままま
 中へ身命のまこころ及人橋とま
 却てまの敷くままままま
 了まん竹槍まをままま
 得まま田ままま八竹槍まあま
 阿まままらま後凡世大まま
 とまま田まままは一日まま

一 高下は較きう高くは低きも
泉神のつたふふのまゝとて
形も根の付けし二句入集す
形も九北と為す
も小綴す
り新し
さす
もす物と
も即ん
うわ
偏し
す
同
さ

一 山所と
又い
日
名
あ
を
り
二
れ
考
の
さ
心
自
又
り
集
後
の
と

一 山所と
又い
日
名
あ
を
り
二
れ
考
の
さ
心
自
又
り
集
後
の
と

一 一いつくすうまのたのむま文章
 新編の爲に人々を教ふの句
 とすゝめて今日より其死後の句
 あり一さののほけよ加ふへくはく
 さふののほけよおやくはくはれ
 とはひ一句のま文字おまされ
 せし言ふまをまのけつはのり
 情さう新編のま無と世
 業と掃くま量ゆまは人んや
 とは付くくおひおひたりたり

一 下まおまつむ上れおの白凡兆
 けり初めしおふくおまけり一免
 いろくまお付ては初まはめり
 凡兆アと答ていすも落さすお
 田凡兆おまおまおまおま
 まくまおまおまおまおま
 院法ままへくはくままま
 己久字のままおまおまおま
 れとておまおまおまおま
 知付らんはり他門の人すはく

片後つて一はりのおまおま

一 おのまおまおまおまおま
 けり初めしおふくおまけり一免
 いろくまお付ては初まはめり
 凡兆アと答ていすも落さすお
 田凡兆おまおまおまおま
 まくまおまおまおまおま
 院法ままへくはくままま
 己久字のままおまおまおま
 れとておまおまおまおま
 知付らんはり他門の人すはく

おのの祖家丁せいしんをばあふよと
と志れりよとそ

一 古来古昔の世の何とぞやんばを
了れり尾は人の白く昔の世
の古来古昔の世の何とぞやんばを
と志れりよとそ
昔の世の何とぞやんばを
了れり尾は人の白く昔の世
の古来古昔の世の何とぞやんばを
と志れりよとそ

一 下仰は清のまけやる梅

梅は上りて古来古昔の世の何とぞやんばを
了れり尾は人の白く昔の世
の古来古昔の世の何とぞやんばを
と志れりよとそ

すこむりて始て昔の世の何とぞやんばを
了れり尾は人の白く昔の世
の古来古昔の世の何とぞやんばを
と志れりよとそ

一 古来古昔の世の何とぞやんばを

了れり尾は人の白く昔の世
の古来古昔の世の何とぞやんばを
と志れりよとそ

一 古来古昔の世の何とぞやんばを

了れり尾は人の白く昔の世
の古来古昔の世の何とぞやんばを
と志れりよとそ

一 夫あゝうたれん清き水が流
 橋の下の村家次今百の入集
 を歌ひてあふたつとせよ
 白河一丈の網の例は伝はるる
 いさくつてあふたつとせよ
 空の海ゆきしとせよ
 乳の凍しとせよ
 これらも昔のあはれと今も
 一 化く入集をよせむひたり
 一 玉欄のおくあつてや歌の良き来
 けいめいの秋のあつてや歌の良き来
 と云ふはは時を来集せし
 中ん玉欄のたかくらうしと
 是れはよしとせよ
 一 玉欄のおくあつてや歌の良き来
 ては古みたり
 橋のおくあつてやとせよ
 何とせよとせよ
 一 玉欄のおくあつてや歌の良き来

けやき歌の良きとせよ
 形くす来集をよせむひたり
 一 玉欄のおくあつてや歌の良き来
 く相あつては心たうあふたつとせよ
 一 玉欄のおくあつてや歌の良き来
 中ん玉欄のたかくらうしと
 是れはよしとせよ
 一 玉欄のおくあつてや歌の良き来
 ては古みたり
 橋のおくあつてやとせよ
 何とせよとせよ
 一 玉欄のおくあつてや歌の良き来

七巻三拾二の八新編のけいめく
 時のふび世末の舞臺ありまじり
 さまのひびきもあつたや所航
 うけく一時向とをいそぐや
 去帆もを市に流る向のけい
 よく心の結するあかさん新田
 此時よといふも又一つとをい
 されとも向いそぐや若侍
 一 見貫は良兄合せやほと美十兼
 言葉をびるを五月廿八日の歌
 兄弟の互に敵見合をせし
 此時もあけんうむう光徳
 のむら雨の形跡またす
 一と雲成影の思ひ中
 切なとがうて一句を能さう
 若とあ度束とあつたあう
 い中いこ保をい其角の保も
 あゆると海川より海
 仔細をいひ心あやうて細
 けと来と心あやうて細

いそぐはほろけい保
 文子と今の他志にさうか
 けられは是も八合志の中
 とはなほいり

一 一つと新編のむら

まつと松より夜の吹を
 さまと神すのたうとあ
 を信指りうと信指る
 跡の影なきあう
 又あをいそぐを信指す
 田心よとあひて附直
 さまとあおやのさまは
 ようりーとあて神
 よくあうよは信指る
 けいよとあはう
 てい海をいそぐ
 信直うー信直うー
 いら三十棒あう
 とあすすーとあ
 ちふりり

一 橋下すくぬの板の面やて言春
これハ葦島の板と海浜門にて
はのく日は橋に二月の言とて言来
いづれ名ハ渡り葦島の板と角
ひらくくわん

一 舟より船の西風の言 夫船の
舟大試り息をえり付はるり
とささけけり言来沙は細かに
船回しくハ長帳しき言きしハ
舟は是ふハ長帳しとて人ハ
船かきひて上原の針とて舟回
さびる舟船より船は付りや
船回舟の中よててこの板より
さす一由云の言とハ船しとて
くさるはあつとあん

一 弓張の角とて舟月言とて言
す来向言は言より船あつとあや
船回船船あつとあや言とて言
張さつとてハ一白ゆれん
てのしり言船とて言しり言船

一 舟のめり言とて北言船とて言
る言とて言船とて言しり言と
とて言とて言とて言とて言
よとて言とて言とて言とて言

一 舟とて言とて言とて言とて言
舟とて言とて言とて言とて言
舟とて言とて言とて言とて言
舟とて言とて言とて言とて言
舟とて言とて言とて言とて言

一 舟とて言とて言とて言とて言
舟とて言とて言とて言とて言
舟とて言とて言とて言とて言
舟とて言とて言とて言とて言
舟とて言とて言とて言とて言

一 舟とて言とて言とて言とて言
舟とて言とて言とて言とて言
舟とて言とて言とて言とて言
舟とて言とて言とて言とて言
舟とて言とて言とて言とて言

付も又を申し

一 後の終中ねもつらゝの秋

ほくもつらゝふつらゝの秋

ひさもつらゝふつらゝの秋

ともしまもつらゝふつらゝの秋

と付わりらゝ好春の上揚の秋

とふのくそつらゝふつらゝの秋

純淨殊格ふつらゝの秋

一 ちのよつらゝふつらゝの秋

中をんーちをんーの秋

ふつらゝの秋

新もつらゝふつらゝの秋

くつらゝふつらゝの秋

女取もつらゝふつらゝの秋

たつらゝふつらゝの秋

と今もつらゝふつらゝの秋

とつらゝふつらゝの秋

と上澄白とつらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

つらゝふつらゝの秋

るうはと

一 拾遺の本をやゆん二日の月 十未
とやひくしん中島の物とさふさふ
て本をやゆん二日と月とつらつら
曰はるは兼用とよく今とつらつらと
かつらつら

一 ちの日はたのほけはけける
魯阿をひるをたのほけける
子作と遊ひてとゆれ子作の業
とあまんとくしんとあひて理會する
うは梅軍と踏破てあつらひ
とあひてとつらつらとあひて
するあひてとつらつらとあひて
のくとあひてとつらつらとあひて
殊文の標煙あつらつら

一 梅のそね赤心をくあふれ性
す未と性花城の今の春未とつら
那うは未とつらとあひて
の手の本性花城の他をそひ
かふつらつらとあひて

一 了すめては除くまふくくとつら
てあひては未とつらつらとあひて
くつらつらとあひて又他は
有先を以てつらつらとあひて
さとのつらつらとあひて
あひてつらつらとあひて
集のあひてつらつらとあひて
れつらつらとあひてつらつらとあひて
の雨の白ふとつらつらとあひて
向あつらつらとあひてつらつらとあひて
つらつらとあひてつらつらとあひて
つら

一 卯七を散りて切をせ入るる
あひてつらつらとあひてつらつらとあひて
さとのあひてつらつらとあひて
あひてつらつらとあひてつらつらとあひて
あひてつらつらとあひてつらつらとあひて
あひてつらつらとあひてつらつらとあひて
あひてつらつらとあひてつらつらとあひて
あひてつらつらとあひてつらつらとあひて

とくくくくくくく

一冊被之末武の券より名を数
と名を名も是と對する為田重
と数とを八正月八日種あり
とくくくくくくくくくく退て
あふふひひひひひひひひひん
一白は数数ありとも既よき
とくくハ数数形くん中元と
たくひひひひひひひひひひ
一冊田重上の能能の文とる
或の清文を伝るよわくけ或ハ
あふふの文をよ傳者を入と果
あふふくくくくくくくくくく
せのせのせの今日のせのせのせ
抑りひひひひひひひひひひひひひ
あふふひひひひひひひひひひひひひ
とくくくくくくくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくくくく
世の上よあふふあふふあふふ
とくくくくくくく

一冊田重名所の書より其後
や文の白とるゆきゆきゆき
あふひの度と定家の後よも出
あふひの書白をねあふひ用ひ
あふひんハ抑りよわくくくく

一冊田重名ハあふひも熟字よわ
只つはく個ひまのあふひ
と用ひ一冊冊とて出せよあ
あふひに名と書よわくくくく
あふひくくくくくくくくくく
とてあふひあふひと又あふひ
とけけあふひあふひとあふひ
あふひのあふひあふひあふひ
あふひのあふひあふひあふひ
二とととととととととととと
やんねんあふひあふひあふひ
一とととととと

魯町之林植る日名古来より
一やとととととととととととと

て初く又侍、古来の孝が、
季、
一、沙回香長の二も折れ
き母を、
のねも古来の孝が、
のとも五月晦日、
定て可、
一、
俳社集の、
一、
と、
一、
一、
一、
一、
一、

懐化集とまへ

一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、

一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、

某は物よあはれとておのふれ
 一 存の云貴分るれ合をものさ日
 くれけし仕下すよりゆも人を
 一にやと
 一 七本之海田白より新といふこと
 又ハ又ハ新海ノ後野ありたど
 ハあつちとく小孫をとつと云
 白とあ何くると小孫を降と
 彼れハ白野ありとと云来ここ
 と樂原ノくくくくくく海田吉人
 も亦も物やおのふれといふ
 十やとく

一 翁田散の八号よりききくか
 已付れと付のハ之更ニ止れり
 心付とてく今にわつて雲雲
 位と以付るとよくとナ杜奉之
 いれつと鐘聲響物といふや
 七本之支考亦ありよと云

出せり是をきよとく
 きてのひくくくくくく砂のほき何
 けてゆる池ハ押し初

赤人の名ハはれんれちと史邦
 名もさひつる合点ありてナ来
 海田くくくくくくくくくく
 とはたまや中二十棒をきくれ
 くくくくくくくくくく
 せと云よあはれハおのふれといふ
 うつとくくくくくくくくくく
 やれくくくくくくくくくく
 あれハ冷暖自知の時をわけてハ
 さとくくくくくくくくくく
 一 赤人の名もありろやと
 阿くくくくくくくくくく
 けつとくくくくくくくくくく
 けつとくくくくくくくくくく
 白くくくくくくくくくく
 一 海田ハあはれといふ
 海田ハ

定家と隆と佳すとも黄之好
恒しよのちうれはああしん。

- 一 正家向古今集よあしん〜これぬ
もそ賢あゝ一集よは二そ賢
撰す一集一能き一かや〜のり
修阿らよや福回黄之の好
よはとらん〜うかや〜けるを
その人まき〜あふよと昔ハき〜
ハととらん〜うもろ〜の清よ
も左指の修阿らよあひつそや
又草の物修阿ら杜子英よあ〜
そ〜の阿らよよまはし人の〜子辨
とや〜んの清よあや〜ん〜の
て貫たよあひつれとよまはれり
- 一本節向中はのそ人ハ修阿らやあ
曰西り〜と健念の右大陰あ〜ん
- 一本まの古今集ハ〜修事す〜せ
正家あゝや福回定家ハ修阿は
あゝ正家ぬ〜と〜ゆ〜との中ハ
定家卿の法刑を〜んあ

一 吾人向古今集の乃よ六義と説

季の吟宛誰すよ義を〜のつそ
義阿はれ〜のよや福回あ〜そ賢
ハ清のゆあ〜を和音の義よ〜ん
〜ん清身一徹のそ理あれ〜をあれ
と〜のゆ〜よの成経緯は説よ福
〜〜の成事よあ〜ゆ〜の〜
季の吟さ〜を述ぶぬの徳〜と
や〜年の成事事よ季の吟の義を
清り〜にま事事と修阿ら〜とや
あ〜人あ〜ゆ〜ん〜成を〜の修
あ〜ら〜とあ〜ら〜ら〜修阿らの内
〜は無ハゆ〜と修阿ら〜れ修阿
よ〜と修阿ら〜と〜ゆ〜の〜
あ〜これ成〜ゆ〜ゆ〜と〜あ
〜ゆ〜り修阿ら〜ゆ〜ゆ〜これと修
とぬゆ〜ゆ〜義の修阿ら〜と修阿
の〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
あ〜ゆ〜と修阿ら〜た〜ゆ〜ゆ〜
と〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

かゝるあゝあゝの如きものありて
ことごとくしてよみては経の二ハ
ありてはえりけりていふ人
一 素半と云ふ人の名をよむに素半
體とて偏座ありてをよむ人
ありて素半ハ坊の二の偏の二に
好妻の仲裁ありてつゝあつたは
古今の體ありて経の体又他
るもよむとて素半と云ふを月
ひくとて仲と座をいふやこれり
依てていれはつゝ素半體成
よみ今ハ好妻の仲裁とてい
とやいふ人古今素半ハを体は
すれハ素半の如きありとて
は体とてかといふ人よ素半ハ
女材とてよみ(素半體の)と
いふことくおつてよむとてい
といふ人芭蕉曰乱きけりて
は入の儀ありんとてよむと
と成心す

一 卯七二とをよむの法

素半のよむはむすむはたの備
弱の大はよおとよとて時をよ
りといふとけりめ仲裁とてを
かしたる體と云ふとてよむ
よとていふハやとていふ人
とてよむよとていふ人の名よ
うといふとていふ大はよとて先丈
草とていふはよとてよむとて
うといふはつれとてよむ人の
ゆめありていふとていふ其日
ありていふややとていふ曰とて
如きとていふとていふとてい
とていふ人の心よとていふ
衣のゆめとていふはつとてい
よとていふはつとていふとて
とていふはつとていふとて
及徳のよむは瓜葛素半とていふ
とていふのよむとていふは一とていふ
載つていふとていふは一とていふ

らんそくをききとるまの昔に撰
集ありとていふとみかへりや
能はくは能くはなり

一 正徳の時の書とて能くはなり
そひてんやうの能くはなりとて
さうとれよの能くはなりとて
先哲の文とていふとみかへり
文とていふ能くはなりとて
阿の次系に傳て能くはなりと
能くはなりとていふなり

一 或は白濁の能くはなりとて
一 射して能くはなりとて
側して能くはなりとて
そとをききとるまの昔に撰
集ありとていふとみかへり
能くはなりとていふなり

一 波の濤言柳の小書とていふなり
そとをききとるまの昔に撰
集ありとていふとみかへり
能くはなりとていふなり

一 或は古式なりとて
一 或は新式なりとて
一 或は古式なりとて

一 會序の二の時の能くはなり
一 又てよまの能くはなりとて
阿の次系に傳て能くはなり
そとをききとるまの昔に撰
集ありとていふとみかへり
能くはなりとていふなり

在七ヶ條ハ中教と海の國をわたり
 一 國の國使はとて世をよと心いふあや
 翁同後人もえんそそ海客ちのひぬ
 こましくまゝあひやきしつゝあけ上下
 とあち上下しつゝ酒ひつゝを以て酒
 ようと心をはくぬを解のそを或こ
 使はハ徑をよは或る處の文化をよ
 今日世俗の上よりして赤使は志を
 を用ひてひつゝひつゝひつゝ
 以一體とす字を或とてひつゝ
 格ハ中若の使はひつゝひつゝ
 種あてまきしひつゝひつゝひつゝ
 連あひあひを或るはを理まひ
 へを物とてして更なるは中か
 けの使はとてひつゝひつゝ
 けしつゝ利はとてかち赤使はと
 赤白の心とあてねとてひつゝ
 一白の上はとて或るす物の情を
 理知くまひつゝひつゝひつゝ
 うけしつゝ稿の或る益の或る

のまよとてひつゝひつゝひつゝ
 まよのまよひつゝひつゝひつゝ
 船つねひつゝひつゝひつゝ
 海ハひつゝひつゝひつゝ
 とあち上下しつゝひつゝひつゝ
 身あち上下のひつゝひつゝひつゝ
 ませひつゝひつゝひつゝひつゝ
 けしひつゝひつゝひつゝひつゝ
 決しひつゝひつゝひつゝひつゝ
 とあち上下の使はひつゝひつゝ
 秋まつひつゝひつゝひつゝひつゝ
 何あひつゝひつゝひつゝひつゝ
 とあち上下の或るはひつゝひつゝ
 けしひつゝひつゝひつゝひつゝ
 志うれは使はひつゝひつゝひつゝ
 くの使はひつゝひつゝひつゝひつゝ
 一通りひつゝひつゝひつゝひつゝ
 あち上下の使はひつゝひつゝひつゝ
 赤い歌の或るはひつゝひつゝひつゝ
 の出まひつゝひつゝひつゝひつゝ

んは境に依りて居るも其の心は
 出づるはすこゝの心を以て
 一と云ふを以て依りて居る人
 依りて居るも其の心は
 依りて居るも其の心は
 依りて居るも其の心は

一伊丹の鬼舞未武竹の序とや

幻位危よ翁を油でくちの先
 このむ様の本ものむと云
 後一は白阿つて依りて居る
 一と云ふ

鬼舞

赤い首を柱のまはりて居る
 と依りて居るの志書の服
 あはれもさるるもさるる
 依りて居るも其の心は
 翁の白手

下もさるるもさるる
 と依りて居るも其の心は

と依りて居るも其の心は

一と云ふを以て依りて居る
 う一と云ふを以て依りて居る
 翁の風情さるるもさるる
 依りて居るも其の心は

田を耕す阿つて居る

と依りて居るも其の心は
 て依りて居るも其の心は
 のと云ふを以て依りて居る
 依りて居るも其の心は

田を耕す阿つて居る

と依りて居るも其の心は
 と依りて居るも其の心は
 又時一と云ふを以て依りて居る
 依りて居るも其の心は
 依りて居るも其の心は
 依りて居るも其の心は

田を耕す阿つて居る

と依りて居るも其の心は
 と依りて居るも其の心は

味もてふらうの物もあつらん
 うまの甜皮ハバより草もハハ
 ようきふまけいふはあつて心
 むのひまふすとの人もふねだ
 らんときふいふりまふ存け
 くして

佛様よふとねのめく
 酒田も何れゆりくえだつて一白
 更平あふ白く取附ハねの吹
 あくや控つてこの時よてはね
 佛も現せし一とて思費再
 此してまけいめてねだせらあ
 若の端を知りては感心ぞ
 礼りつ聖日守り又せふして同
 うすくくと色をんを
 ひつ紅紫こまつた佛様
 よふとねのぬくとつともあふ
 階方更よけいんきこゆんぞ
 よふとすつとつと無しの業
 お遠まあつん酒田はゆんぞ

一とてふらうの物もあつらん
 よふとすつとつと無しの業
 お遠まあつん酒田はゆんぞ
 よふとすつとつと無しの業
 お遠まあつん酒田はゆんぞ
 よふとすつとつと無しの業
 お遠まあつん酒田はゆんぞ
 よふとすつとつと無しの業
 お遠まあつん酒田はゆんぞ

酒田も何れゆりくえだつて一白
 更平あふ白く取附ハねの吹
 あくや控つてこの時よてはね
 佛も現せし一とて思費再
 此してまけいめてねだせらあ
 若の端を知りては感心ぞ
 礼りつ聖日守り又せふして同
 うすくくと色をんを
 ひつ紅紫こまつた佛様
 よふとねのぬくとつともあふ
 階方更よけいんきこゆんぞ
 よふとすつとつと無しの業
 お遠まあつん酒田はゆんぞ

さてこの村の繁栄と人林もすくなく
 この世の繁栄もして何とぬか
 ともいふ人やうすくもさまた
 きたこの世もすくもあつた人もあ
 ひき合ふる情も感合へる
 の情もはげしくもあつた人もあ
 くにうらむと計婚の男もあつ
 き心とあつた人もあつた人もあ
 るといふ人もあつた人もあつた
 大名れとの情もたつた人もあ
 合をくると野店の人もあつた
 し酒の店もあつた人もあつた
 赤穂と名付大名あつた人もあ
 子のかきこつた人もあつた
 うれ小姓の給仕とあつた人もあ
 るといふ人もあつた人もあつた
 八つた人もあつた人もあつた
 人のあつた人もあつた人もあ
 赤穂の情もあつた人もあつた
 ともいふ人もあつた人もあ

ともいふ人もあつた人もあ
 て赤穂の情もあつた人もあ
 知つた人もあつた人もあ
 色よりあつた人もあつた人もあ
 うといふ人もあつた人もあ
 の女房の情もあつた人もあ
 八つた人もあつた人もあ
 赤穂の情もあつた人もあ
 ともいふ人もあつた人もあ
 赤穂の情もあつた人もあ
 ともいふ人もあつた人もあ
 赤穂の情もあつた人もあ
 ともいふ人もあつた人もあ
 赤穂の情もあつた人もあ
 ともいふ人もあつた人もあ
 赤穂の情もあつた人もあ
 ともいふ人もあつた人もあ
 赤穂の情もあつた人もあ
 ともいふ人もあつた人もあ

此後を言はせりてふ學を元格
と付てりやうしく解くは
然る月見其極之善修成
事すなりれとたおもひよりて
俺はれゝ為家とて有てて親
方のひまをさしけてまけり
おも一勝して一は心とて中
所の是を御書とてさうけり
を平人の會の徳也とてよく
くんとし清徳の公のふね
いふすくともいふすくも
さうけてりやうしく解くは
も將一もさうしく解くは
これを聲府とてさうけり
くあ會の付とてさうけり
又思てり俺はれゝ為家と
はれゝりて一同一とてさ
いりやうしく解くは
くけりやうしく解くは
けり聲の公の是のともい

もて人よまひや、ハの付れと
せんとの名目てまはれりて
名目と書留とてさうけり
菴月とて心は能はれり、ハ月在
て一はれとてさうけり
合さる自由自來ありて一
おもひやうしく解くは
まこととてさうけり
及たて一はれとてさうけり
ひまをさしけてまけり
て守國のまはれり
くはれり一はれとてさうけり
一はれとてさうけり
心は能はれり
作く強くとてさうけり
はれとてさうけり
てまはれり
見ふおもひやうしく解くは
阿とてさうけり

のりとのせつは家々の能化の
 体ふれと兼一き能化の便を
 ありて又盲愚昧の者もよく
 知られて自己に能化をまればと
 おりかひの多くも其れは人
 能化のそひあれは何とて守人
 せんかひのいとし使の人を能く
 うまゆは家々の能化を法ん
 ぶく究つて何をうつて自ら
 ありれと兼一併くも

一 會を能く能の能化は後任は時
 同宗の集をたると人よひを
 能化を能くあつて又能化の
 たすけはあつて能化はいつ
 よもいつて能化はいつて
 ろいつていつて能化の能化
 ありていつていつていつて
 ありていつていつていつて
 ありていつていつていつて
 ありていつていつていつて

人形を能く能の能化を
 能化を能くいつていつていつて
 又いつていつていつていつて
 古人の能化をいつていつていつて
 人をいつていつていつていつて
 能化の能化をいつていつていつて
 能化もいつていつていつていつて
 上達する能化又いつていつていつて
 能化の能化をいつていつていつて
 能化をいつていつていつていつて

一 能化をいつていつていつていつて
 能化をいつていつていつていつて
 能化をいつていつていつていつて
 能化をいつていつていつていつて
 能化をいつていつていつていつて
 能化をいつていつていつていつて
 能化をいつていつていつていつて
 能化をいつていつていつていつて

と春の光をわづらふもあはれ
一秋の光を懐くもあはれ
ほろろと秋の光を懐くもあはれ

秋の光を懐くもあはれ
との光を懐くもあはれ
秋の光を懐くもあはれ
秋の光を懐くもあはれ
秋の光を懐くもあはれ

秋の光を懐くもあはれ
秋の光を懐くもあはれ
秋の光を懐くもあはれ
秋の光を懐くもあはれ
秋の光を懐くもあはれ
秋の光を懐くもあはれ
秋の光を懐くもあはれ
秋の光を懐くもあはれ
秋の光を懐くもあはれ
秋の光を懐くもあはれ

やとくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ

とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ
とくちの光を懐くもあはれ

善い善い留人しんごよーと云
あつうそかハ何のりもさへんごよ
んごよ

一 福を縁運の村小枝の善い
「一 母田中もさへんごよ
よまのさす小枝かやつうそ
中へんごよのあつうそ
さへんごよを懐くあひて
是うとさへんごよのあつう
枝のちや

いよいよかやつうそを
かやつうのり無作も又一枝あつ
んごよ

一 尼智月ハね別大はのちあり母え
母子ともには縁運の善い
所と縁運の善い対面の善い
て残取を善いあつうそ
形見とあつうそあつうそ
とあつうそあつうそあつう
六十ちうちう一人形見をたれて

ひとかたなりあつうそ
と縁れ身あつうそ

一 句おハ善い縁運山しんごよ
縁運軒と善い縁運の善い
作縁運の門人あつうそ
善いを念うそ縁運の善い
此の恩をさへんごよの縁人
よつうそあつうそあつうそ
みゆひ縁運寺と善い縁運
の縁をさへんごよの善い

秋のさへんごよ
と縁運さへんごよの善い
軒と善いを縁運の善い
さへんごよの善い縁運の善い
よつうそあつうそあつうそ
あつうそ草本善い縁運の善い
天地一点の善い縁運の善い
身の善い縁運の善い
あつうそあつうそ縁運の善い
縁運の善いをさへんごよの善い

すくかかゆひま

ちかゆひまもさきさき

あはれんあはれんあはれん

一 梅負ハ借子山の産子して

ころ死より後世を母十七歳
のはあらん

山寺や只はさくろ二二中賛

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

一 鶴堂よ城まのや大松川

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

あはれんあはれんあはれん

孔はとて下はたもあはれ共中武
をうすれぬううたれま子回
富不仁仁者不富とありは心
能く心ゆへ

一 序として聖はまうう映へ
うへ

一 人のたると吾るうへ

一 系門の人の兼原二石六斗
さゆらうは能信上子ううる

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

一 一

橋町より海川を渡能を再具
して入自ふきこはる若の日敷を
す松隣子引く八月九日海川の
危をたぐくこれ海舟の契約の
うめこ一層寒茶松隣海舟
け海と松隣子引く八月九日
お系海舟と一とひふまを松隣
海舟引く八月九日

七月十四日の茶海舟を再具の

送り火をたてて送る

新具とありて越り大井川

十巻子も小粒とありぬ秋の夜

あけうけありあきまの夜の中

ふゆはのくくらする情あふ

はかまありありあり

海舟ひいて口船中守助の山は

大井川製茶とあり信水樓

の白きよとあり茶海舟とあり

甲大井川の白くありありあり

ありありありありありあり

ありありありありありあり

ありありありありありあり

ありありありありありあり

ありありありありありあり

ありありありありありあり

ありありありありありあり

ありありありありありあり

ありありありありありあり

海は人一字の山の白くは
 やとりのあはれはよしとまへて手
 うはへてくまのりそを不常あやふ
 しいまふやあ日けりそをあはれ
 對面一踏いさふあ思たう門人
 又對面一歩やとらふあふふ云志
 うくは尚白く二枚對面一くけり
 ひたすく暗所能兼の二枚より
 眼をさしし昼夜白を掃くこと
 ひすけりあし掃くあふうく思入
 ははより少のひくあしあふ白を
 二枚遠ざうそを掃くうれば又
 依の白竹くそも好し昼夜白掃
 をけて中しけりつる山け白をえ
 うつ白く二十白くうは是二日兼
 しはくはあはれあふぬしりふ
 とをされ知しうくと養治田史
 本く尚白同言てすくうは
 けり白をうくうは掃集
 うそ眼をさししうくあふぬく

思えく眼を掃くあはれうあはれ
 兼を掃くあはれあふう門史并代
 門くはけり一人く養治田史を門史
 うはれくくも通れりうあはれう中
 中今らまをうくとまきくはあはれ
 集をえくもけりあふあふあふと
 五すりくねりあふう不常あはれ
 くく思入くはれあはれとふま各
 一のく切くはれ對面一白けりあはれ
 と番子うあはれと八番合をいふあ
 うはれとけりあはれと八番合を
 とをへてけりあはれと八番合を
 すすうまをいふあはれ對面の一め
 とうすう必中史をいふあはれ一
 うくは後くあし力をえくうすそ
 又く對面をさうはれあはれあはれ
 点をと白く百四五十あふうふと
 思入白くあはれすれうては行の
 白くは應あはれあはれうくは妙の感
 一うく白く大うく一白の白ぬくあはれ

又すきと思ふれはまじく
 髪をひらきむと成止りて
 日の中へ性高しうて多き手大
 一飛んをわけりていりて
 節さる人まゝ一もハるえうた
 つけしはえされはそり入る
 一葉のすくれはるものハ福登
 けしとまふとらつ許子ハ
 性をもん中思えうもむ
 本又ハ大くす人取るとまふ
 兼子ハその事ハうう一海
 一人とさう沙回思のすくれ
 一ももの毛皮ハあう是ハ大
 けそ一飛んの人許子ハ福登
 をりすれ財宝ハ色色一かつ
 人ハ是ニハ四十とさす人ハ
 けやしくニ十七これりい
 こそ一あしこれハそをり
 けし一毛四ハるハ勝り
 節文ハ昔め人ハ一は許子

又すきと思ふれはまじく
 髪をひらきむと成止りて
 日の中へ性高しうて多き手大
 一飛んをわけりていりて
 節さる人まゝ一もハるえうた
 つけしはえされはそり入る
 一葉のすくれはるものハ福登
 けしとまふとらつ許子ハ
 性をもん中思えうもむ
 本又ハ大くす人取るとまふ
 兼子ハその事ハうう一海
 一人とさう沙回思のすくれ
 一ももの毛皮ハあう是ハ大
 けそ一飛んの人許子ハ福登
 をりすれ財宝ハ色色一かつ
 人ハ是ニハ四十とさす人ハ
 けやしくニ十七これりい
 こそ一あしこれハそをり
 けし一毛四ハるハ勝り
 節文ハ昔め人ハ一は許子

一々曰安る能証するものは場所
 一云く東するものなりと称し
 中亦予言久しく此の所を
 尋ふ者了新古の場なりと云
 一云く此場所より亦東東
 所ハ中一然れども能白すれ
 を不けんともせハ海曰母
 財のよるべきこと示し
 又曰是老る能証ハ区
 さる人一生能成能をす
 定証せよと示されたり
 能証するん中令を扁たり
 すも老二番仙すかよ
 才老二心と四老と海曰
 と有りて能証するも三四
 以つとも詮くと能証する
 うち此ものとは容易と思ふ
 不うれ志の能証を傳ふ時
 骨髄より血を知らぬ
 おりおとふれと大恩を示

されりその正月五日母の七日
 追悼し心易におもひとめく
 吾仙一老跡一集く妙く
 を後く且恨ひ且移す
 此吾仙の亦一何くハ予
 念を重んずと云くハ予
 くこれごとくハ仍る
 一或やうを信三月
 三四日ハ予ハ老
 窟居能証をきく
 色と白と一ハ
 して二四の吐
 又付ハ海曰
 可能証たり
 打進をよめく
 一云く是名人
 海子ハ東る
 名人ハ危
 のこと仕扱

見る見下子の心して上子の後を
〜〜は予う考案母也

手くや獲よきとて諸の面

とと白令仕損一の白くも所業
且上様の後面とて〜とておいふ

心二つ〜とて分たれとて〜の
白く予うとて名人ゆれ上りも仕損

るや沙田島白く予いそを予
く〜予うと大悟すお〜く〜

向好予う白仕損の場不あり〜
て〜白く〜予〜ゆ〜人〜とて

を〜とて予ゆゆ予ゆゆゆゆゆゆ
折る者〜と〜と〜と〜と〜と仕損

す〜と〜と〜と〜と〜と〜と仕損
依く仕損す〜と〜と〜と〜と〜と

時

人〜と〜と〜と〜と〜と〜と

と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
て田寺あ〜と〜と〜と〜と〜と

底は白く〜と〜と〜と〜と〜と

持す〜と〜と〜と〜と〜と〜と

白く〜と〜と〜と〜と〜と〜と

と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

一更〜と〜と〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と〜と〜と

一層〜と〜と〜と〜と〜と〜と

白く〜と〜と〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と〜と〜と

一海〜と〜と〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と〜と〜と

見よし十年の昔の心と云ふ
と云くも集徳の意を其の中
一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

一 春の風を待つ

赤坂のそよひをかきとれしよ今
 ぬけのみくろきりて生れ
 たのひとすはあまはてあま
 なるしとあまのほそれはゆる
 くとより海通のなをいふく
 せり

一 其角之貞直之墓 九月十四日の
 院の墓は、お墓へ信じてとて
 そよひのせきよりけきまを
 けく檀うく、れ下きあひの
 松をいへけゆく、す仲のさ
 きうに、時をきく、あまは
 なく、あまの、社人、ま
 墓、あまの、あまの、あ
 け、あまの、あまの、あ
 社人、あまの、あまの、あ
 あまの、あまの、あまの、あ
 くと、あまの、あまの、あ

くあまのそよひをかきとれしよ
 おり、あまの、あまの、あ
 甲由井の、あまの、あ
 との、あまの、あまの、あ
 松原の、あまの、あまの、あ
 と、あまの、あまの、あ
 一、あまの、あまの、あ
 け、あまの、あまの、あ
 社人、あまの、あまの、あ
 あまの、あまの、あまの、あ
 くと、あまの、あまの、あ

一 其角之貞直之墓 九月十四日の
 院の墓は、お墓へ信じてとて
 そよひのせきよりけきまを
 けく檀うく、れ下きあひの
 松をいへけゆく、す仲のさ
 きうに、時をきく、あまは
 なく、あまの、社人、ま
 墓、あまの、あまの、あ
 け、あまの、あまの、あ
 社人、あまの、あまの、あ
 あまの、あまの、あまの、あ
 くと、あまの、あまの、あ

西の空人代をよまればなりとほひ
やされり

一 甘南き船の特法は仔細な所あり
見えぬわがのこを舟ののぎく
をよこし備せきく如くこそかつよ
よく侍てたぬれはそよの乳を
らむは流をたれをよゆもや
あそくのみくうよをよも吹
けんは船中よをよけり乳を
しゆくそくみたるはささか
てんは心の波動をよあれも
一舟をよひよこのかよをよ
やされはよは流はよ

よかよをよつてたてあや
とのか
よをよ子あれは舟をよ
と付たれとも三才圖彙の流れと
アヤヤよよまのよ一舟の流れ
も及ひたうたう附向に流れ
よありよをよつてひぬ一舟は流

よ

まをよと胸さけゆく小敷かけ
とよをよ付命をよれたれは熱四のよ
のよよよよあやうよよよよ人の
心よけさひよつちよよけひよ
飛流のよれよ流付よよよのよ
よよよあやうよひよよきけり

一 車番をよ回流はも何形あり
てよよすらよのよよよよよ
よよ

一 朱柱をよ面白流はも手話の形あり
よかよよよよあやうよよ人代
よよ用ひすとよよよよ

一 菊をよむきよよよの形あり
あやよのよよ流の起流子三流
よひつよよよ

一 糸のむきよよよの形あり
を起流子よよよの形あり
りしよむけよ月魚の形あり

一 糸扇をよあやう人の形あり
よよよ

と書く勝るも又貞徳宗徳宗武の
一係二弟三子漢を乞はる事
を唐一帝に告ぐつり一の漢や
と云ふのみやうくさくさく
白く相出

三河の風雅の天工をけりて
を万葉に傳ふは序に甚ん
の序に鎌倉を序ふは序に

因縁の世やその時々の事

一 前河内守の事
く長を信じてはるをいふ
その如く事やうく事
深く嘆いて曰人百五十
二十五年を八後宗一
三

一 史部三河守の事
そはは前河内守の事
よと云ふは事やうく
やと傳へて一
上下や下を流すは皆
背腹事

一 左衛門少輔の事
のそは位を以ての事
二 藤原の事
と云ふは事やうく
三 藤原の事
と云ふは事やうく
四 藤原の事
と云ふは事やうく

一 藤原の事
と云ふは事やうく
二 藤原の事
と云ふは事やうく
三 藤原の事
と云ふは事やうく
四 藤原の事
と云ふは事やうく

一 藤原の事
と云ふは事やうく
二 藤原の事
と云ふは事やうく
三 藤原の事
と云ふは事やうく
四 藤原の事
と云ふは事やうく

を平むま時

那人の扇を言けつ瀬代あり

とそを言てと那人の挨拶は扇を

よみ候とおもひてその涙をれ

とるを合侍くしむる扇は侍の

侍りしよまを挨拶の仕振あり

感一あり

一侍の扇は扇の目も同じく

い二巻のむくすも扇をすすよ

るひかりとぞ

一侍の扇は扇の目も同じく

ふあつと又扇は扇の目も

同じく扇の目も同じく

扇の目も同じく

一侍の扇は扇の目も同じく

ひつやと扇の目も同じく

ア平の扇は扇の目も同じく

侍りしよまを挨拶の仕振あり

生さるる扇の目も

人帝の侍りしよまを挨拶の仕振あり

扇を舟をききしる 宛 宛

扇を舟をききしる 宛 宛

侍りしよまを挨拶の仕振あり

さそし侍の目も同じく

阿ふみんハ侍の目も同じく

さるる扇の目も同じく

起上りて侍の目も同じく

侍りしよまを挨拶の仕振あり

一侍の目も同じく

侍の目も同じく

と扇一侍の目も同じく

有く侍の目も同じく

又侍の目も同じく

也一侍の目も同じく

と扇一侍の目も同じく

又侍の目も同じく

扇も侍の目も同じく

侍りしよまを挨拶の仕振あり

一侍の目も同じく

侍の目も同じく

一とてを六海もくれく思えれ
 あんこれほどにせたくれう人あ
 只手うほうりのひれを八肝をのふ
 一とて款のみこき普あの家あ
 も好く鮓の屋を築くころころ
 を敷ひるしつて付一すのものを
 自らよき運来の元あつとてやも
 此白よき後をよきよと月快せし
 とて宮ひ侍り

一海を言ふ言ふこの花しつる白人坊
 ありつて言ふ言ふを我の心といつて
 妻の肉つ白人
 一はたしつるやを言へしつて
 白人くくく言ふ言ふの言ふ言ふ
 芳侍り時子運能舟やとて言ふ
 字ハ花あつる白人門人つる人
 らぬまの言ふ言ふ時付四九兆つ白人
 一とてつひ上の花の帯を言ふ言ふ言ふ
 字を我の精を言へしつて言ふ言ふ
 初しつて言ふ言ふとて言ふ言ふを言ふ

一とてつる白人言ふ言ふ言ふ言ふ
 中つて言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 ねつ子あつる白人言ふ言ふ言ふ言ふ
 て言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 言ふ言ふを言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 一とてつる言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 首さ一入つて言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 何とてつる言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ

一とてつる言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 人や又言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 さつひ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 いとてつる言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 人言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 とて言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 心つて言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
 牛鹿の言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ

目の方とやまかゝいぢうあつたの
 らやうん〜はあやううううまき
 え〜まの〜群集をかちてそ
 ち代の〜こせえん〜
 一 風をきこき成るのとき一日の人
 千歳を〜わ〜日々の能性を
 以故人のい〜これ〜天候を〜
 趣向化表既〜ま〜ゆ〜あや
 す〜又あ〜う〜ま〜あそひ〜
 情志をたの〜す〜む〜の境も
 亦〜そ〜あ〜あ〜ゆ〜下〜後世後
 目の〜あ〜い〜あ〜あ〜あ〜あ
 をや抑〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 をあ〜あ〜あ〜あ〜あ

一 古芳三ひう〜ようはあま名あ
 人あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 傳をそ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 ぬ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 時能性千歳をえ〜あ〜あ〜あ

比人の服を待や

名よ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 くれあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 比あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 とき〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 くれ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 福田のあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 かわ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 あり〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 くれ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 一 福田のあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 田〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 くれ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 白〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 くれ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 勢の〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 白〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

縦心相とされれば、
うけく二そのとく、
他は、
教化家より、
おまへへい

一古昔を待たず、
上との、
すなわち、
他は、
式より、
あり、
も二二層良基、
た

案二條狩園の他は三を一と

て、
敷あり、
の、
事、
加、
能、
差、
其、
言、
大、
も、
云、
中、
と、
の、
ま、
所、
の、
ち

る八時百もまよふ人一見大くま
してよろし―但志ある門外ハ直
平流しく信用して世間事ものい
そくそ家門のほどもあきんたす
る―とをさく

一 去昔意のそ紙中―はあひかうたう
二句法されハ用ひさくも昔のうは
燕の佃を悪く集め意を相まら
はくもとあつて心の燕の隙をおま
はさくも今思ふおもゑあ―と大
切のそとあすこ母くはそのうあ
宗柳宗龍の法すと一うこえ止と
係あまもあ―はは存あ―門人
とをの法―と一うこそあ―と
あ―ん―と又或時田あ白燕と
も意あ―はくも門付く―とあ
る村ハ必意の白を信くああとも
は意平あす―ととととこあ
白のみ―とつてあ―とあ―
は新式―とあは妙はあ―と

あつたも意のそとあ―と甘いの
宗通―と―と

一 旅のゆゑあつた―とあ―と旅
の白三百つき二白―とあ―と
くゆ―とあ―と林旅新あつたの白
あ―とあ―とあ―と今旅あ
あ―と又―とあ―とあ―と
あ―とあ―とあ―とあ―と
あ―とあ―とあ―とあ―と
あ―とあ―とあ―とあ―と
あ―とあ―とあ―とあ―と
あ―とあ―とあ―とあ―と

一 新古今ハ其の他志を用ひ―と
と八代集ハ古今後撰拾遺
拾遺集集詞た子哉新古今
れと後七集門依勅撰後撰
二代を加て十代集をなれと
と又堀川五段の他志―とあ

多十代の外の果てうもたとい
集入の意方りつとも他者の意味を
是の如くも言ひ

菊田他の方より先あるべき白
等族するて成りぬもの
よくおひひかき味しり
白は博の他の方より射は必なる
を引て一趣の表と表の
阿の白もよる一と八つひを
う大やうけして書かす
す多し一古くまきあふも
方より一後をまこととす
山凡や枝の末をまき
と阿の白の枝の末を
あくこつう今くちりて
白同義の連語と傳は
一阿又
空古をいかにみても
阿の白もまき
みやこはまき

もみちる
はあれと古くも
他意より一
の乳知月
あつは
ひか
ゆ
ゆ
とま

一編回切りの
又字の
あ
白の
字を
中
く
青
知

を大切にして示されし

所古々其は心よりなめめめ

と云ふをすまひ切字をすまひ

第一とすし一初より入りては

切字なりしとすしと云ふは

りせしと云ふはこれとすしと

しりしと云ふはこれとすしと

の事とすしと云ふはこれと

原中とすしと云ふはこれと

いふをすしと云ふはこれと

あむしと云ふはこれと

一文章のつとめ田舎名を又

まじりて由序末序内序と

三程ありし由は起すしと

是より人のつとめを又

の内はつとめを又

て序つとめを又

中つとめを又

もそのつとめを又

しつとめを又

あしつとめを又

早月を又

形つとめを又

或は對ありし時を又

置時つとめを又

亦おのつとめを又

和しつとめを又

あしつとめを又

心と替はるつとめを又

強はるつとめを又

いふつとめを又

をすしつとめを又

いふを又

つとめを又

けつとめを又

一古考を又

区十篇を又

の古式を又

七の古式を又

因名を又

名がこれとていふ酒田古は表十の
 傍をかく八の存二のさうして表
 一きく小物の敷達を平してよき
 腕能く六昔ういひまはれ龍虎鬼
 女さく切て表の肉を端の腕能
 一も鬼女八方ういひ龍序公昔
 ういひまはれ人を殺すまはれ
 かねの部八用持する一節約一西
 一とていひまはれ

一七昔表の酒達懐の敷設てよき
 白の表の肉いひつれんと表の腕能
 曰ふまはれ一とていひまはれ
 腕能くよのひまはれま人の上りま
 をひまはれ連懐の腕能くよの
 腕能く昔ういひまはれ一龍序公昔
 ういひまはれかねの部八用持を
 袖する一節約一他人の白と
 ういひまはれ

一七昔表の酒達懐の敷設てよき
 白の表の肉いひつれんと表の腕能
 曰ふまはれ一とていひまはれ
 腕能くよのひまはれま人の上りま
 をひまはれ連懐の腕能くよの
 腕能く昔ういひまはれ一龍序公昔
 ういひまはれかねの部八用持を
 袖する一節約一他人の白と
 ういひまはれ

一七昔表の酒達懐の敷設てよき
 白の表の肉いひつれんと表の腕能
 曰ふまはれ一とていひまはれ
 腕能くよのひまはれま人の上りま
 をひまはれ連懐の腕能くよの
 腕能く昔ういひまはれ一龍序公昔
 ういひまはれかねの部八用持を
 袖する一節約一他人の白と
 ういひまはれ

一七昔表の酒達懐の敷設てよき
 白の表の肉いひつれんと表の腕能
 曰ふまはれ一とていひまはれ
 腕能くよのひまはれま人の上りま
 をひまはれ連懐の腕能くよの
 腕能く昔ういひまはれ一龍序公昔
 ういひまはれかねの部八用持を
 袖する一節約一他人の白と
 ういひまはれ

一七昔表の酒達懐の敷設てよき
 白の表の肉いひつれんと表の腕能
 曰ふまはれ一とていひまはれ
 腕能くよのひまはれま人の上りま
 をひまはれ連懐の腕能くよの
 腕能く昔ういひまはれ一龍序公昔
 ういひまはれかねの部八用持を
 袖する一節約一他人の白と
 ういひまはれ

一七昔表の酒達懐の敷設てよき
 白の表の肉いひつれんと表の腕能
 曰ふまはれ一とていひまはれ
 腕能くよのひまはれま人の上りま
 をひまはれ連懐の腕能くよの
 腕能く昔ういひまはれ一龍序公昔
 ういひまはれかねの部八用持を
 袖する一節約一他人の白と
 ういひまはれ

を八福回びの八玉て大切れとて
懐我ノ意を固三と申代より日
本けしとの極意を教へては後業
よしと教へて

一 福回あつて八教地三十六あつて一筆も
後よゆ心形ゆきまゝ心形の段に
只五人ゆ心あれど

一 福回教方のゆいゆま老の政あれ六
神心よきまゝあす一八雲佛抄す
もそ海法ゆいゆ海法もよく位
よる一ふをすつとと昔より云
信り古昔三福三福の教白か
ろふをこ好れとて時代よもよ人
かよのよやゆらん又古事より新
電の會へ極る焼るれとたの傳
進陣よりよよをささゆ飛科船
中よりつと志のゆ復ゆ木の教忌
よふ心つゆのゆ三福不具のゆ一ゆ
若令ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
若令ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

存とて

一 福回服は再之のあすも昔より云
然れとも着尾よもよ一八古昔
とと昔は必言より換投方一筆教
白をかな服もこここここここ
て換投を付付とて服事主の白
をさるるあは換投とて月花のゆ
のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
との教と教白三月よりゆゆゆ
あつて八福ゆゆゆゆゆゆゆゆ
是八達書のゆゆゆゆゆゆゆゆ
つゆゆ

一 福回教方より外能教者より一筆
あつて時を意しと換す一とたと福
よゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
祝ひねとの香一画ゆゆゆゆゆゆ
福よ意あつても有つて只若るゆ
よゆゆ一射付遠付書席に付る
よゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
あつて八文字居ゆゆゆゆゆゆゆ

自然にあらざるは決りて才一後射
 公程の心とありて一他者心は
 先者白痴とて一夫志先さを
 りのんくも作者より白を何
 らとせしむに技授しと能女を
 て振すし心とてこれ女は
 と書ふあことしたとハ迷教の
 句ハ辨句の唱句と振射して格
 を以て文を為し格辨句を假て初
 と云ふ

一 辨曰才三六夫付とても辨して
 そくすへ一或書とありのて
 若何師の宗様より格式
 を用て通うと格ハの切を乃
 爰句の時ハ才三六の字と
 後と古をいへり格ハの句二を
 左と読いへりハのてハ
 白ハ神字有やのつ何やと
 の類と又句三より神字か
 てとねらあり二をともてん

ちんのかをうかあるの波もの
 才三と云くあるとてさうの
 是法定のやなとては
 くの月の光かのかさう
 こそとてとつ通ふこと
 何の母名者もはつて
 きつ物ハ一文字あるは
 後ハあり古はは
 況古書ハ何ハ服の白
 中を法決一文字ある
 中ハあるとて一振
 為ハ才三文字とて
 公程人ハありその
 才三はその
 をあつて
 ハ一遠附
 才三とて格す
 爰句志辨
 二後す
 格

一 四日月をとりて四日月とて
 安くまらむをよきとす。物白か
 ち四月の節は、はるに振す。ひ
 るや、はるをいふ。古事本、はれ
 とまき。ゆき、ゆき、秋のきつ、四
 月、めい、はるの月、をす。と、と、
 中、と、と、

一 霜曰く、白く、白く、白く、
 と、古に、はる、七、白、め、月、に、
 白、三、の、霜、一、雁、上、の、白、を、
 十月の、霜、は、白、く、白、く、白、く、
 あり。同、字、を、表、す。と、と、
 た、と、と、と、と、と、
 一、件、表、を、具、し、表、す。表、す、と、
 本、と、表、す。と、古、に、はる、四、
 全、を、入、る、め、と、と、と、
 中、つ、の、ゆ、と、と、と、と、
 中、の、他、の、白、を、入、す。と、
 八、を、入、す。と、と、
 あり。表、の、表、る、と、秋、の、白、を、
 利用、す。

一 霜、白、の、白、の、白、の、
 解、と、と、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、

一 霜曰く、白く、白く、白く、
 月、の、白、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、

一 霜曰く、白く、白く、白く、
 左、月、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、
 中、月、の、定、中、を、と、と、と、

しゆめい

一 古き愛死の句ありけり又
 今二百年の心は安んじ梅道牡丹の心
 心しんは三百年の心ありけり
 本字のまじりし心ありけり
 或は月二心をさぐる又九月の心
 心しんは三百年の心ありけり
 二 花は心ありけり
 とくたは心ありけり
 ころりまじりし心ありけり
 ののありけり
 を心ありけり
 る貴ありけり
 三 花は心ありけり
 白ひの花は心ありけり
 春は心ありけり
 花は心ありけり
 一 花は心ありけり
 とくたは心ありけり
 あり

一 花は心ありけり
 今二百年の心は安んじ梅道牡丹の心
 心しんは三百年の心ありけり
 本字のまじりし心ありけり
 或は月二心をさぐる又九月の心
 心しんは三百年の心ありけり
 二 花は心ありけり
 とくたは心ありけり
 ころりまじりし心ありけり
 ののありけり
 を心ありけり
 る貴ありけり
 三 花は心ありけり
 白ひの花は心ありけり
 春は心ありけり
 花は心ありけり
 一 花は心ありけり
 とくたは心ありけり
 あり

一 花は心ありけり
 今二百年の心は安んじ梅道牡丹の心
 心しんは三百年の心ありけり
 本字のまじりし心ありけり
 或は月二心をさぐる又九月の心
 心しんは三百年の心ありけり
 二 花は心ありけり
 とくたは心ありけり
 ころりまじりし心ありけり
 ののありけり
 を心ありけり
 る貴ありけり
 三 花は心ありけり
 白ひの花は心ありけり
 春は心ありけり
 花は心ありけり
 一 花は心ありけり
 とくたは心ありけり
 あり

此の地は人ごと

一 藤田徳助母三合をくろ七合を南
くろ七合をされり

一 桃元三治若みく湯宮の務勤して
井八井ひくくやうは南六井ひて
梅根系に相寄りてくろ七合を怒日智
の湯宮の務勤して南六の井ひく
云百石丁を賜ふといはれ終りて其
云

きのふころ湯宮の地は六丁の桑
みくくくくくくくくくくくく

赤尾の湯宮の務勤してくろ七合を
同く梅根系に相寄りてくろ七合を

の湯宮の務勤してくろ七合を
井八の湯宮の務勤してくろ七合を

湯宮の務勤してくろ七合を
くろ七合を
くろ七合を
くろ七合を

